# トランクスはお好き？

月島　捷樹

　はみ出た。
朝、家を出た時、股間から変な感触があった。直後に右足を伝ったそれはズボンの袖からこぼれ落ちてきた。どうやらトランクスのボタンが取れてしまったらしい。どうせ取れるなら家を出る前にしてほしいもの。これではまるで読者に「……でかいのね」と思われてしまうではないか。言っておくが俺は標準だ。いや、むしろちっこいと言ってやろう。・・・。
これではまた読者に「お粗末な方か」と思われてしまう。いやいやいやいや、ここぞと言う時は大きいぞ。普通の時はドングリのようだが、・・・。ここぞと言う時はしっかり大きく硬くなるのだ。つまり、膨張率の問題だな。下を向いていたそれは上を向くと同時に膨張して立派な大砲へと変化するのだ。
　朝から何の話をしているんだろうか、俺は……。
とりあえずはみ出た物をしまいたい。しかし・・・、どこで。そうだな、どこかトイレの有る所で。と、言いたいがこの辺りには無さそうだ。いっそズボンのポケットから・・・。
ーはっはっはっは。
そんな年頃の少年が弄っている様な真似なぞこの大衆の面前で出来るか、馬鹿者。しかしはみ出たままでは歩き難い。というか、気になってしょうがない。どうしたものか。
「よう、木村」
　そうか、俺は木村と言う名前か。
「なんだ、鹿之介」
「誰が鹿之介だよ」
　違うらしい。では後藤という名前にしておこう。
「何かお前、妙に挙動不審だな」
「都合よく感が鋭いな、後藤」
「何の都合だよ」
　説明して朝から笑いのネタをこいつに提供してやる義理は無い。
「後藤…」
「ん？」
「金を出せ」
「何でだよ！」
　無料で笑いのネタを提供する気が無いからだ。とは言えないので、仕方なく何か別の理由を考えよう。
「なぁ、後藤」
「だからなんだよ」
「お前はトランクスか？」
「俺は後藤だよ」
「いや、それは解っている」
　下らない返しに為す術を失う。何か良い理由は無いか。
「おはよう、木村、後藤」

「おお！おはよう」
　また新キャラが現れた。どうする？
［たたかう］
［じゅもん］
［にげる］
［さけぶ］
　叫ぶってなんだ。しかも何で逃げるの後に選択肢が有るんだ。
「無視かよ！」
「木村は人間だよ」
　後藤がオヤジギャグキャラクターになりつつ有る。
「よう！ブリーフ愛好家」
「誰がブリーフ愛好家だよ」
「すまん、俺ビキニ派なんだよ」
　ビキニかーい！顔に似合わずビキニとはやるな、新キャラ（名前無し）。
「なんか今日は朝からパンツネタ全快なんだよ、こいつ」
「なんで？」
「ちょっと待て、俺をパンツ大王みたいに言うな後藤。それはお前だろう」
「いつからだよ！」
「あはっはっはっは・・」

　結局事情を説明し、この二人に無償で笑いを提供してやり、俺はコンビニのトイレではみ出た息子を収めてきた。ついでにトランクスも購入。新品おろしたてのトランクスはどうもいかん。が、背に腹は代えられん。
「替えてきたか」
「ああ、履き心地は最悪だ」
「んな事は聞いてねぇよ」
　なんだこいつは。トランクスは履き心地が命だと知らんのか。言うなれば布一枚をパンツ型に縫い合わせただけの、何のフィット感もないものだが、風通しの良さは格別だ。ズボンの下から吹き抜ける風が股間を通る時の格別な心地よさはブリーフでは味わえまい。
髪が風を感じます。とはカツラのCM宜しく、風を感じるのだよ。
「トランクスは男の浪漫を語れるんだぜ、ブリーフ後藤」
「どんな浪漫だよ…」
「変な綽名付けるんじゃねーよ、トランクス木村。…じゃあ何だ、こいつはビキニ長谷川か？」
　へぇ。やっと名前が出来たな、新キャラ。
「やめろよ…」
っていうか、そもそも後藤はブリーフなのか。まだ一度も答えが聞けていない。

ーはっ！？
　まさか、こいつノーパンか？そうか…
「じゃあ、ノーパン後藤だな。宜しく、ノーパン」
「え…、お前ノーパンなのか、後藤」
「なんでだよ！ちゃんと穿いてるよ！」
「何を」
「何を？」
「何をって、パンツに決まってるだろう」
「ひょっとしてパンティーか？」
「なるほど！」
「おい！」
「宜しく、パンティー後藤」
「ああ、よろしくな、ブルマー男爵」
「てめぇら、いい加減にしやがれ！」
　後藤をいじめるのは面白い。というわけで、爵位を返上した後藤はボクサーブリーフだった。どうもいかんねぇ。最近はぴったりフィットに拘っている奴が多くていかん。長谷川が言うには、トランクスだとこぼれ落ちてしまうんだそうな。あー、そうかい。長谷川のビッグマグナム自慢はそれくらいで良いだろう。後藤は拘った事が無いという。
男たるもの、パンツに拘らぬとはけしからん。そしてトランクスでないやつはもっとけしからん。

　今日は楽しいお出かけだ。待ち合わせて可愛くないような可愛いような女の子三人と共にカラオケという前座を済ませて居酒屋で呑み、メーンは夜中のチャンピオン・カーニバルだ。今日も股間のチャンピオンが唸りをあげるぜ！
というわけでカラオケは文章表現が面倒くさいので行った事にして、居酒屋だ。
「おい、長谷部」
「…長谷川だよ」
「・・・。何でも良いじゃねーか、でかマラちん」
「…はいはい。んで、なんだよ」
「どの子にする」
「ああ…。後藤が既にゲット気味だから、どっちかかな」
「いや、敢えて奪う手も…」
「お前は鬼か…」
　一人後藤が一生懸命話を盛り上げている。しかし余り面白くない。所詮ブリーフ男爵などこの程度だ。女の子の愛想笑いに気付かんとは愚か。
「二人で何話してるの」
「いや、ちょっとした男の密談です」

「えー、何？なんか企んでる？」
「なになに？面白そう。何企んでるの？」
　女の子が俺達によってきた。後藤の絶妙な顔がこっちを見る。
「いや、企んでるって言うか、ただ…」
「男の密談です」
　ただ…、じゃねーだろアホ。どうせそう言う場合、決まってその後の台詞が思いついていない。
「なんだよ、また二人でパンツ談義か、お前らぁ」
「きゃははは、なにそれー」
「えー、パンツ談義って何？」
「なんかムッツリくさーい」
「黙れ！パンティー伯爵」
「ぱ…、パンティー？」
　俺の反撃で女の子達の後藤を見る目が一変した。
「地味に爵位をあげたな、後藤。おめでとう」
「ふざっけんな！俺はボクサーブリーフだっつってんだろ！そもそも長谷川なんてビキニ男爵じゃねーか！」
「おいおい、格下扱いかよ」
「ビキニ穿いてるの？」
「いいねー、ビキニー。私男の人のビキニブリーフ好きー」
　おいおい、意外にもビキニモテしてるぞ。どういう事だ…。
「やっぱ男はビキニですよね」
「うんうん、セクシーでいいよねー」
　なんだ、このパンツ盛り上がり・・。
「男はやっぱりトランクスだろ！」
　カッコよく決めた筈だったんだ。
俺にとってトランクスは絶対なんだ。なのに・・・

　なんだこの時間が止まったかのような沈黙と硬直は……

　向こうで後藤がニヤリと笑う。
「今どきトランクスはないよねぇ？」
ーな、なんだとぉ！？
　ここぞとばかりに後藤の反撃が始まった。
「う、うん、ちょっとトランクスは最近見ないよね…」
「ビミョー。」
「あたし、ビキニがいいー」

「ですよねー、しかも拘ってトランクスとか、・・・ないない」
「おい、後藤…、その辺にしておけ」
「何だよ、さっきは散々俺に変な綽名ばっかり付けやがって。お返しだ馬鹿野郎」
　傷心で何も言えねぇ。そんな馬鹿な。トランクスが認められないなんて・・・
「そもそもトランクスなんてオヤジ臭くてかっこ悪くて穿けるかよ」
「こだわりの無いおまえが言うな、後藤…」
「あ、長谷川さんは拘ってるんですかぁ」
「え？そりゃあ、下着にはこだわるよ。俺は高校生の時からビキニだったし。誰に何を言われても、自分の良いと思った事は貫くね」
「かっこいい～」
「いいねぇ、そう言うの男らしいっていうか」
　何気に長谷川株が急上昇。馬鹿な、ビキニで株が上がる酒の席なんて訊いた事がねぇ。そもそもなんでパンツトークを肴に酒を飲まねば成らんのか…。ちくしょー。

ーちっくしょぉぉぉぉぉぉぉお！！

「大丈夫ですかぁ、木村さん…」
「うるせぇ！どうせ、どうせ、トランクスの帝王だぁ」
「大丈夫か、木村…」
「帝王なんだ」
「きゃははは、男爵、伯爵、帝王だって。木村さん、一番偉いよー」
「だろぉ？俺が一番偉いの。うん、俺、帝王」
「じゃあ、しっかりしてください、帝王さま」
「はいはい、しっかりしてますよーん」
「じゃ、そろそろ僕たちはこの辺で失礼させてもらうよ」
「うん、またねぇ」
「じゃあ、俺達も。いこか。木村の事、よろしく」
「はいはーい、じゃ、行きましょ、木村さん」

　というやり取りまでは覚えている。
今どこかのホテルの一室で、裸になって寝ていた。もちろん、隣りに裸の女付き。
頭がガンガンする。とても女を抱く気分じゃねぇ。っていうか、既に抱いた後なのか？これは…。裸の女がベッドでスヤスヤと寝息を立てている。
「おはよう、帝王さま」
　トイレから出ると女が起きていた。

「あぁ、すまん。全く記憶が無い」
「あら、ざーんねーん。さっきは激しかったわ〜」
「そうか…。すまん、全然覚えてねぇ」
「嘘よ」
「はい？」
「だってシャワー浴びてる間に寝ちゃうんだもん。悔しいから脱がせて一緒に寝てただけ」
　悔しいの意味が解らん。ご苦労な女だな。
「ねぇ…」
「何だよ」
「何でトランクスなの？」
「・・・。もう何だって良いだろ。俺は単純にトランクスが好きなだけだ。オヤジ臭いと思うならそう思えよ」
「ううん、そこまでは思わないけど、なんで拘っているのかなって。最近トランクスの子は確かに見ないから」
　お互い服を着ながら、やっぱりホテルにいてもパンツ談義だ。
「かっこ悪いと思うなら素直に言えよ。その方がよっぽど楽だぜ」
「うーん。かっこ悪いとは思わないけど、今どきあまり居ないのに、どうしてそこまで拘っているのかと思ってさ」
「履き心地なんて人それぞれだろ。ただ、男にしか分らねぇ話だよ。たぶん」
　頭がボーっとする。
「ふーん。私も穿いて見ようかな…」
「女が穿いてどうするんだよ。ノーパンで短パン穿いてるのと変わらねーだけじゃねーのか、それは」
「ああ、そう言う履き心地…」
　どういう物を想像しているのかは知らんが、まぁ、どうでも良い。
「でもさ、一回穿かせてよ」
「はぁ？」
「今もう一枚持ってるんでしょ」
「ん？」
「ほら、後藤さんだっけ？言ってたよ。来る途中で履き替えたって」
　後で覚えていやがれ馬面後藤め…。新しい設定が出来た事もついでに喜べ、後藤。
　俺が来る途中で履き替えたトランクスをだすと、女が喜んで穿いて確かめていた。意味が解らん。
「これ、本当は今穿いているはずの勝負パンツだったんだよね。なるほど、柄は確かにこっちの方が良いかな」
　おっしゃる通りですとも。俺の運気はその勝負パンツと共に消えたわけか。なるほど。パンツの力は偉大なり。ボタンが外れたフロントから黒い森が丸見えだぞ…。

「ねぇ」
「ん？」
「これ、ちょうだい？」
「はぁ？」
　この女は一体何なんだろうか。居酒屋では特にトランクスが良いと言っていたわけでも無いし。確かにビキニに関しても良い反応では無かったけど。
「あたしたちの記念に」
「何の記念だよ」
　酔いつぶれて裸で寝てただけだぞ。そもそも今日会ったばかりだ。
「じゃあ付き合おうよ」
　じゃあってなに…。トランクス欲しさに付き合おうって言われたのは生まれて初めてだ。
「なんだそりゃあ…」
「だめ？」
　だめって言われても断る理由も無い。どうせ彼女もいなかった事だし、まぁ可愛くなくも無い。何より、このまま何も無しで別れるのは勿体無いので付き合ってしまう事にした。
「おい…」
「んー？」
「お前、そのまま帰るのか」
「ふふん、良いじゃん」
ー何が…
　女は俺のトランクスを穿いたままスカートを穿いた。捲り上げれば中身はトランクス…
色気も何もあったもんじゃねぇな。
「じゃあ、木村さんもあたしのパンツ穿く？」
「断る」
　だから、なんで「じゃあ」なんだよ。
「あっははは、そうだよね。パンティ木村帝王になっちゃう。あっはははは…」
「それは後藤だけにしてくれ…」
「あ、じゃああたしはトランクス高木だよねー」
　やっと名前がついたか、女。
「このままずっとトランクスで過ごすつもりか」
「だめ？」
「生理の時とかどうすんだよ」
「あ、そうか。じゃあ、生理パンツの上から穿く」
「そんなに気に入ったのか？」
「ううん、っていうか、お揃いじゃん。ボクサーとかビキニは女子用もあるけど、トランクスって無いでしょ？だから木村さんの、もっとちょうだい？」
　ああー、そういう話ですか。お揃いを持ちたがるタイプね。しかしパンツまでお揃いにしたが

る女を見るのも初めてだわ…。

　高木は俺の愛用トランクスを勝手に拝借しては出かけるようになった。なんだかよく分らないが、トランクスが愛の絆になっているらしい。意味が解らん。俺のトランクスを穿いているとどこにいても俺と繋がり合っていると感じるらしい。
ーなんじゃそりゃあ。
　こんなトランクスに繋がりも何も感じたりはしないが…。
「何トランクス眺めてニヤニヤしてるの？愛してるんだね、トランクス」
　いや、待て…
「ニヤニヤはしてない」
　どこの変態だ、俺は。
「愛してもいない？」
「愛ぃ！？…する物なのか、これは。ただパンツを穿くならトランクスに限ると思うだけだ。ブリーフとかビキニとか、あんなぴったりしたものなんて穿けるか、って思うくらいでな」
「フィット感より解放感…、的な？」
「まぁ、そう言う事だ。…、服着ろ、服」
　俺の後ろでトランクス一丁の高木が腰に手を当てて昼間からビールを呑む。
「良いじゃない、お互い解放感を好むもの同士…」
「この裸族が…」
　あれ以来、高木は俺と半同棲のような関係に在る。高木は基本的に家では服を着ないらしく、常に素っ裸だった。一応言っておくが、ここは俺の家だ。
「っていうか、そろそろ帰れよ、お前…」
「じゃあ、これ貰って良い？」
「・・・・。それは置いて行け」
「じゃあヤだ」
「自分で買えよ」
「あたしに似合いそうなの、買ってよ」
「お前、そんなにトランクスが好きか」
「うん。貴方も好きでしょ？」
「好きも何も…、まぁ、穿くとしたらトランクスに限るな」
「じゃあ私も穿くならトランクスって思う」
　口癖だと思うが、こいつの言う「じゃあ」の意味がさっぱり解らん。
　基本的に俺はファッションに興味は無いが、女と言うのは基本的にぴったりとした服装を好むものでは無いだろうか。高木はスタイルも悪くない。顔はともかく、胸は小さいが腰は括れていて、足も細過ぎもせず太過ぎもせず…。良いプロポーションの女が、昼間から酒呑んで裸で家をうろつくという異様な光景は直ぐに見慣れたが、そこにトランクスが加わるだけでどうしてこ

う女に見えないものか。普通なら抱きついて襲いたくなるだろう。なんだ、この魔除けのようなトランクス効果は一体。しかもそれが俺の勝負パンツなのだから尚更気持ち悪い。俺のトランクスを穿く高木を襲う、と言う事は、俺が俺を自分で襲うような感じがして嫌なのだ。

「ねぇ、祐希ぃ、ブラもした方が良い？」
「・・・・。垂れるぞ…」
「どうせ垂れるほど無いもん…」
「一応しとけよ、ちらちら見えるだろ」
「でも祐希しないじゃん」
「お前…、今まで彼氏にブラジャーさせてきたのか？」
「ううん」
「じゃあなんで俺には下着をお揃いにしたがる…」
「うーん…」
　どうも、読者の皆さん。俺の名前は木村祐希。やっとフルネームが出て来ました。…そんな事はどうでも良い。
　付き合い始めた当時、高木はぴったりしたＴシャツにデニムパンツというラフなファッションが多かった。しかし、俺の家に泊まる事が多くなり、トランクスを常用するようになると、ワンピースやブラウスにスカートといった、・・・妙に似合わないファッションになっていった。
　確かにトランクスではなぁ…。
「あたしねぇ、そもそもカップルでお揃いとか、全然興味無かったのよね」
「はぁ？」
「でもね、あんたと付き合うようになって変わった。トランクス穿いたら何か変わったの」
「女の下着じゃねーし」
「だからさぁ！」
「いやだ！」
「まだ何も言ってないじゃない」
「俺にも女のパンツ穿いて見ろって言うんだろ？」
「うん。世界変わるよ～」
–別の意味で変な世界の扉を開きそうで嫌だ……
「お揃いで一緒になっているって感じ。なんか繋がっているって言うかね。それがなんか、…なんだろ。えへっ、ホッとするのよ」
–トランクスでぇ？
　なんか変な女を取っ捉まえちまったなぁ…。
「なによ」
「ひくわ」
「なんで」

「もったいねぇ」
「なにが」
「お前、良い体形してんだから、普通に前みたいなファッションでいいじゃねーか」
「なにそれ」
「最近、トランクスに合わせて着る服選んでるだろ」
「だって…」
「だって、なんだよ」
「もうヤなんだもん、体形が分る服着るの」
「なんで」
「祐希は、何で私と付き合ってるの？」
「はぁ？…別に・・・」
「祐希もあたしじゃなくて、私の体が好きなの？」
「うーん、正直分んねぇ。付き合っても良いかなって思ったし、一緒にいて面白けりゃいいんじゃねぇの？」
「じゃあ、あたしの事好きじゃないの」
「好きだから付き合ってるんじゃねーの、俺ら」
「そ、そうなの？」
「気にした事ないね。好きだぜ、俺。お前の事」
「ぇあ…、ああ、うん。ありがとう」
「なんだよ、俺に聞いといて実はお前の方が俺の事好きじゃねーんじゃねぇのか」
「そんな事無いよ」
「ひょっとして…」
「ち、ちがうわよ」
「まだ何も言ってねぇよ」
「私も愛してる。祐希、本当よ？」
「でも、トランクスはもぉ～っと愛してる☆…ってか」
　そこで横を向くな、おい。そして何故黙る・・。
「ぃや、あの…」
「そぉーかよ！俺はトランクス以下かぁ！パンツよりも魅力が無い男で悪かったよ」
「ちがうの！」
「何が違うんだよ！いつもお前俺の事よりパンツの事ばっかりじゃねーか！」
「違うったら！」
「何が違うんだよ！」
「好きなの！」
「トランクスが？」
「うん。ぁいや、そうじゃなくて！」
「おぉー、おぉー、それが本音かぁ！」

「……ちがぁーーーーーう！！」
「じゃっかぁーしぃわ！このパンツ一丁の裸族がぁ！」
「あたしがトランクス好きなのは…」
「おぉ、やっぱり好きなんじゃねーか」
「あんたが好きだからよ！」
「意味わかんねーよ！」
「祐希の事が好きだから、好きな人が好きなトランクスが好きなの！祐希がトランクス嫌いなら、あたしも嫌いだもん！こだわっている男が好きなの！誰に何と言われても、自分の信じるものを愛する人が好きなの！……ばかぁー！」
　聞いているこっちが恥ずかしくなるようなセリフを真っ赤な顔で泣きながら叫んだ高木は座布団を俺の顔に投げつけて拗ねた。
いつまでたっても壁に向かって三角座りで拗ねている。
まだ拗ねている。
日も暮れて肌寒いはずなのに。シャツを持ってきても「ぷいっ」としやがる。
–ガキかよ！
「なぁ、はらへったよ。休みの日に一日中拗ねるの辞めてくんないかな」
　返事が無い。ただの屍ではないだろう。
「おい、風邪ひくぞ」
「・・・・・」
「なぁ、悪かったよって言ってんじゃねーか。いい加減機嫌直せよ」
–めんどくせぇな・・・。
「おい、飯食いに行こうぜ…、って、おい・・・・」
「んあ、…うん」
–寝てんじゃねーよ。
　俺が強引に肩を引くと、高木はそのまま「くてん」と倒れて目を覚ました。腕を引っ張って起き上がらせると、そのまま俺の肩に両腕を回して抱きついてきた。首に絡みつくその腕はまるで本当に屍のように冷たかった。
「体冷えてるじゃねーか、お前。風邪ひくぞ」
「うん…。ねぇ、・・」
「ん？」
「風邪ひいたら看病してくれる？」
「ああ、してやるよ。良いから服を着ろ。はらへったから飯食いに行こうぜ」
「うん……、だるい」
「おい・・・」
　俺は自分のおでこを高木のおでこに付けて見た。
「やっぱり熱があるじゃねーか。そんな格好で部屋の隅っこで寝るからだよ」
「うん、寒い。ごめん」

　仕方がないから高木をベッドに寝かしつけて俺はコンビニで飯を調達する事にした。何が悲しくて休日にコンビニの飯なんか食わなきゃいけないんだか…。
と、考えている内に嫌になったので少し遠出をしてスーパーまで買いに行った。
そういえば最近は隣りに高木がいた。一人でスーパーに来るのはいつ以来だろうか。そんな事を考えながら買い物を済ませて帰宅する。
　自炊するのも久しぶりだな。
高木と付き合うようになって、あいつがうちに泊まり込むようになってからは、いつも休日はあいつが飯を作っていた。お互い社会人で会社も別々だが会社から帰るといつも先にあいつが家にいて、俺の帰りが早い時は飯も用意してくれていた。トイレ掃除も風呂も…、まるで結婚生活のように。
　今思いつきで適当に作り上げたとしか思えない設定が出来上がり、いよいよトランクスとは何の関係もない話になっている。と危惧している読者のお前たちの顔が浮かぶぜ。俺もそう思う。相変わらず高木の下の名前は美保ではないが、出て来ない。というわけで、設定付けは適当に進めながら決まって行くので突然「そうなのか」という展開になることが多い。高木は謎な女なんだよ。…たぶん。
　高木は猫舌なので少し冷ましてから持って行く。
「ぬるいなぁ。少し時間経ってる？」
「なんだ猫舌じゃないのか」
「うふふ、ありがとう。でも猫舌じゃないよ」
　設定と違うじゃねーか。まぁ、こんなこともあるさ。
「卵粥も作れるんだね」
「それくらいはな」
「祐希は？」
「適当に弁当買ってきて食ったよ」
「ごめんね」
「いいよ、気にするな。食い終わったら風邪薬飲んでから寝ろよ」
「うん…」
「しっかり汗かいて寝れば代謝で治るだろう」
「うん‥」
「なんだよ、泣くほど不味かったか？一応味見はしたんだがな」
「ううん、ちがう…」
「まぁ、今日はもうゆっくり休め。明日、お前も仕事だろう？」
「うん…」

　女とは時に面倒くさく、時に可愛いものだ。まぁ、過ぎなければそれで良いのだろう。寝室に高木を寝かしているので電気をつけられない。薄暗がりの中を手探りで自分の着替えを取り、明

日の準備を済ませ、シャワーを浴びて寝る前の一杯を、…久しぶりに一人でボーっとしている。いつもは寝る前に高木と二人で映画でも観ながら一杯やってるんだが、今ここには俺一人しかいない。リビングも電気をつける事なく、テレビも消したまま、インテリアのライトのみの明かりでビールを呑んでいた。
–そろそろ時間だな…
　深夜零時頃になって、こっそり夜這い…のように高木の眠るベッドを訪れる。寝るわけじゃない。
「…ん、んん？」
「そのまま寝てろ。パジャマの着替えと体を拭きに来ただけだ」
「いい、自分でやる…」
「良いから寝てろ。起き上がるな」
「でも…」
「病気の時くらい俺の言うことを聞け」
「うん…」
　パジャマは搾れるほどの汗でびっしょりだった。まるで老人の介護でもしているかのように、高木の体を拭いて行く。いつも元気で明るい高木のこんな弱り果てた姿を見て、俺もどうかしていたのだろう。パジャマを着替えさせて再び布団を掛けて高木を眠らせた。そんな高木の寝顔が愛おしくて、思わずキスをしてしまった。顔を放すと高木の目は俺を見ていた。
「愛している。これからも。ずっと傍にいてくれ。俺の傍にお前がいて欲しい。‥結婚しよう」
　高木はまだ頭がボーっとしているのだろう。目を丸くしていた。こんな時に言うもんじゃない。それは解っている。でも、風邪で寝込んでいる高木の、こんな姿をみて、面倒を看ていて、改めて俺は高木が好きなんだと実感した。よく分らないが、もう今の俺には高木のいない生活が在り得なかった。放したくなかった。いつのまにか俺の生活には高木が無くてはならない物になっていたのだ。
　高木は泣きながら俺に抱きついてきた。
「うん…、うん。あたしも。愛してる」

「祐希、祐希、もう朝だよ、起きて」
　翌朝、ソファーで寝ていた俺を高木が起こしてくれ……
「おまえなぁ！」
「んー？まだ遅刻はしないだろうけど、そろそろ起きないと…」
「服着ろよ！」
「あっはっはは、平気だよ。もうこの通り！さっぱり治ったもん。…はい、コーヒー」
　そういって相変わらずトランクス一丁で家の中を動き回る。朝陽のかかる窓際で素っ裸の女が背伸びをする。
「今日も良い天気ー。気持ち良いね！」

　見慣れた光景だ。
「誰かに見られたらどうするんだよ」
　だがそれが当たり前の光景であってほしい。
「大丈夫だよ」
　そういってソファー越しに俺の背中に抱きついてくる。軽くキスを交わすとお互いスーツに着替え始める。いつもの朝の光景……ではなかった。珍しく高木がパンストを穿いている。俺は思わず凝視した。
「なにー？もしかして、パンストフェチだった？」
「い、いや…、珍しくどうした」
　高木が普通に女物のパンツで出勤しようとしている。
「今日、家に帰るわ」
「突然だな…」
「うん、紹介したい人がいるから。…それまではお預け、かな」
「あ、ああ…」
　高木のいつもの調子に呑まれ、高木は恐らく昨晩の事など忘れているのだと思っていた。
「さびしい？」
「まぁ、ちょっとな」
「じゃあ、はい」
　そういって高木はさっきまで穿いていたトランクスを俺に差し出した。
「なんだよ」
「これをあたしだと思って、スーハースーハーしときな」
「・・・・・。するかよ！って、そもそもこれは俺のだ！」
　笑いながら玄関を出ようとする高木が振り向いて真顔で俺を見る。
「また戻って来て良い？」
「お前の大好きなトランクスがあるからな」
「いじわる。今度はちゃんとあたしがあなたに嫁ぎに来るの。トランクスに嫁いでも良いけど？」
「馬鹿やろう。俺に嫁ぎに来やがれ、この変態裸族が」
「…愛しているわ」
「ああ、俺もだ」
「うん、愛してるわ、あたしのトランクスちゃん。待っててね」
　高木はいつもの冗談めかした顔で俺の腰に手を当てて俺の穿くトランクスにそう言った。
「俺のだっつーの！」

　結局、高木の下の名前は出て来ずに終わりだ。